

## 第3章

### 大口中学校の

### 10年間の成果と課題を説明します

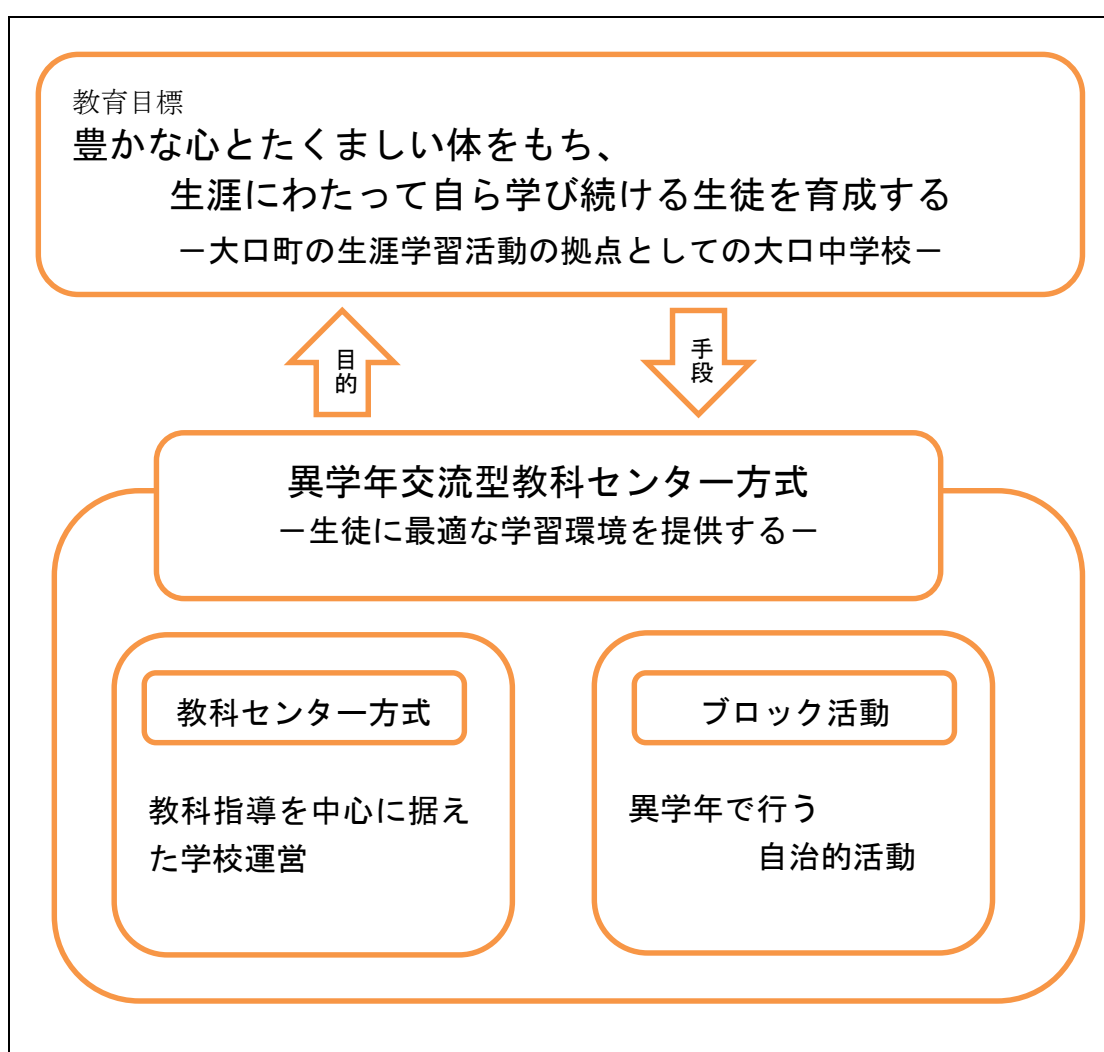
第3章では、「大口中学校が目指してきたこと」を整理し、教科センター方式とブロック活動について、その「成果」と「課題」を明らかにします。

## 1 大口中学校が目指してきたこと

第1章で、大口中学校は次の3つの特色を持つ学校であることを述べました。

- I 大口中学校は、教科センター方式の学校です。
- II 大口中学校は、ブロック活動が盛んな学校です。
- III 大口中学校は、大口町の生涯学習活動の拠点です。

このことを踏まえ、大口中学校がこの10年間で目指してきたことを図で表すと、次のようになります。



## 2 「教科センター方式」の成果と課題は何か

第2章Ⅰ・Ⅱでは、教科センター方式の現状について、Q&A方式で説明してきました。本節では、教科センター方式の〈成果〉と〈課題〉を整理します。

### 〈成果〉

- ① 生徒は、教科ごとの専用教室がまとまって配置してあるフロアに移動する。このことは10年間のうちに習慣化され、日常生活の中に定着している。
- ② 国語フロアに来れば国語の先生、数学フロアに来れば数学の先生に会える、質問できる、という意識が生徒の日常生活の中にある。大口中学校の生徒にとって「教科」の先生は身近にある。
- ③ 各教員がそれぞれの担当教科においてチーム意識をもっている。そして、各教科の指導に対する責任を共有している。
- ④ 教科の教員がチームとなり情報連携が図られ、教員個々における指導内容や指導方法の格差が出にくい状況になっている。

### 〈課題〉

- ① 教室移動をすることが、イコール、生徒の学習意欲を喚起させることにつながっていない。教室移動した先に、どのような授業と出会えるかが、教科センター方式の成否のカギを握る。いまだ、多くの授業で、従来型の知識教授型の一斉授業形式にとどまっている現状がある。
- ② 教科教室・教科ラウンジの整備について、生徒が「その教科の学習に適した教室」と実感するまでの環境整備がなされていない。国語や数学の学習に適した教室とは何か、研究する必要がある。
- ③ 教員が教科ラウンジの環境整備に費やす時間が、日常業務の中に生み出せないという、教員の多忙化の現状がある。
- ④ 教科ラウンジを、ブロック活動の集会場所として併用してきた経緯がある。その結果、教科を学びに移動してきた生徒の学習意欲を喚起したり支援したりする教材教具や掲示物の展示が、中途半端なものになってしまう傾向がある。
- ⑤ 教科センター方式と学力向上との相関が評価できてない。学力をどのように定義づけ、それをどのように測定するのか、研究する必要がある。

### 3 「ブロック活動」の成果と課題は何か

第2章Ⅲでは、ブロック活動の現状について、Q&A方式で説明してきました。本節では、ブロック活動の〈成果〉と〈課題〉を整理します。

#### 〈成果〉

- ① ブロック活動によって、異学年による活動が日常的に生まれている。その結果、他校と比べて多くの生徒に、リーダーシップを学ぶ機会が与えられている。
- ② ブロック活動によって、下級生は上級生の姿に学ぶ機会が日常的に生まれている。その結果、下級生の時に学んだことが上級生になって活かされ、年々、ブロック活動の充実が図られてきた。
- ③ 10年間のブロック活動の中で、生徒間の中に、異学年交流に対する安心感が生まれた。このことは、実社会に出てから役立つ経験値となるだろう。
- ④ ブロック活動で身に付けさせたい力（ATT）を明示することができた。ブロック活動で身に付けた、対立を解決する力や感情をコントロールする力、見通しをもって行動する力、多くの人たちと共に問題解決をする力は、実社会で通用する力の尺度となるだろう。
- ⑤ ブロック活動は、まさに、生徒に身に付けさせたい「自治・自浄能力」の醸成の場になっている。（詳しくは、資料編 p.57 参照）
- ⑥ ブロック活動によって、いわゆる“学級・学年の壁”を乗り越え、大口中学校の「全ての教職員で全ての生徒を育てる」という指導方針が、全教職員で共有するものになった。

#### 〈課題〉

- ① 教科の学習内容が増加する中、ブロック活動のための時間確保が難しい現状がある。
- ② ブロック活動が進めば教科の学習がしわ寄せを受ける。一方、教科の学習を進めればブロック活動がしわ寄せを受けるという二項対立的な関係になっている。ブロック活動が、国語や数学で学んだことも相まって適切に生かすような場にならないか。
- ③ 大口中学校の教員の業務は、他の学校と比べて多い。なぜなら、大口中学校は、教科の指導、学年・学級の指導に加え、ブロック活動の指導が加わるからである。この3つの指導の有機的な連携・統合を図ることができないか。
- ④ ブロック活動として10年間築いてきた活動の中にも、目的があいまいになっている活動がないか見直し、精選を図る必要がある。